

右一首遠江國歌

〔枕草子十二〕ある女房遠江守の子なる人をかたらひてあるが同じ宮人をかたらふと聞きて恨みければ親などもかけて誓はせ給ふ、いみじき空言なり、ゆめにだに見ずとなんいふ、いかゞいふべきといふと聞きて、

ちかへきみとほつあふみのかみかけてむげに濱名のはし見ざりきや

〔倭訓栞前編十八〕とほつあふみ 倭名抄に、遠江をよめり、遠つ淡海の義也、枕草紙の歌にはしか見えたり、たつは通音つあ反たはふ反ふ也、万葉集にとへたほみとも云へり、今はとほたふみとよめり、皆音のつゝまりたる也、神名式盤田郡に、淡海國玉神社みゆ、もと國に湖ありしが、永正七年に地震洪水の變ありて、湖海一に通せしより、今は名のみなりき、山つなみにて寶螺の出たるにや、今切の渡りといへり、もとは虎關の詩に、左海右湖同一碧、長江合含兩波瀾と作れり、

〔古事記傳七〕遠江國造師賀茂淵說に此記古に國名を遠江など二字に約て書るは、後人の爲なり、其は後に定まりしことなれば、此記には必遠トホクワ淡海など、有べきわざなりと云れき、今考るに、

此記は凡て國地名、或は一字三字にも書又二字に書るも、多くは後に定れる字と異なり、此古の書格なり、然るに遠江など後文字の如く書る所に稀にあるは、淡海と書ると准へて思ふに、信に後人の改めしこと、は見えたり、中されどかの和銅六年よりや、前にも國名などはかづかづ文字を擇び又二字に約られしこと有しも知がたければ、遠江なども決て後人の爲とも定め

がたくもあれば、今は舊の如くておきぬ、されど古の書格は、必師說の如く有しことぞかし、註和名抄に、遠江止保太阿不三とあるは、阿字衍なり、登保都阿布美を約むれば、登保多布美阿を約めなり、然今人云ぞ、萬葉十四十五に、等保都安布美、同二十十六に、等保多保美などもあり、さて此國には、古

湖ありしを、以此名を負り、近江國の京に近きに對へて遠とは云なり、